

原著 (Article)

自然観と生命表現の変容

—事例分析 1 (栽培体験) —

**The Transformation of a View of Nature and
a Life Expression
— A Case Study 1 (A Cultivation Experience) —**

山崎 真里*

YAMAZAKI, Mari*

磯部 錦司*

ISOBE, Kinji*

要 旨

本研究は、経験の質によって「生命のイメージ」とその表現はどのように変化し、自然観が構築されるのかを、事前・事後の作品の表現内容の比較分析において示そうとするものである。直接的経験の質が深まるほど、そのイメージは、「生命への感じ方」の広がりや、環境との「状況や関係性」で表されたことを栽培体験の事例から考察する。

This research shows how an image of life and its expression change and how a view of nature is created according to quality of experience, by comparing the work before the fact and the work after the fact. We examine a case of a cultivation experience and consider the fact that as quality of a direct experience deepened, its image was indicated by “expanse of the way of feeling to life” and “conditions and relations.” between the environment and life.

キーワード：芸術，美術教育，自然観，栽培

Key words : Art, Art education, View of nature, Cultivation

1. はじめに

本研究は、「経験の質的な深まりにおいて変容する自然観・生命観とその表現内容」を、絵画表現から示そうとするものである。2001年、磯部は「自然観と〈生命〉表現の変容—外界との関係を問う絵画表現の実践から—」⁽¹⁾において、生命の表現は経験の質的な深まりをとおして「統合的、全体的な関係性や状況的内容」へと変容することを示した。その内容は、大学生、中学生、小学生、幼児を対象に、自然環境の中で「外界とのコミュニケーション」を課題に体験を試み、その体験の事前と事後に、「生命のイメージ」を表現し、その比較から個人内に見られる外界に対する感じ方の変化を表現内容とその過程から考察し検討したものである。そこに述べられた特徴は、「一体化を成す行為において表れるイメージ」「諸感覚の統合において総体化するイメージ」「抽象的表現において表れる総体としてのイメージ」であった。今回、対

*椋山女学園大学教育学部

椋山女学園大学教育学部紀要 投稿・執筆規程の2による査読付き論文(2014年1月6日受付; 2014年1月17日受理)。

象とする事例は、保育者・教員養成大学における授業科目「生活科」, 「保育指導法(環境)」における栽培体験の事前事後による調査からである。土を耕すところから野菜を育て、間引きをし、収穫し、食べるという体験から、直接に生命と関わる過程をとおして、表現がどのように変化し、自然や生命への感じ方や見方、考え方が変化するかを検討する。事前と事後に「生命のイメージ」を絵画で表現した内容から分析し、自然観・生命観の変容をもたらす経験について質的考察を行い、その経験によって変容する自然観について述べていく。

2. 研究の方法

2-1. 調査対象

本研究は、椙山女学園大学教育学部で2013年度前期(4月~7月)に開講された「生活科」と「保育指導法(環境)」の授業および受講学生を対象として行った。それぞれの授業で体験する栽培活動の概要と受講者数を次に示す。

(1)生活科

生活科では、授業期間全体をとおして栽培活動を行った。受講学生が体験した内容は、畑を耕す、野菜の苗を植える、種蒔きをする、芽生えの観察をする、間引きする、抜き菜でお雑煮を作る、里山歩き、野菜の収穫をする、調理する、食べる、である。受講学生数は登録者が47名であるが、途中で受講を放棄した学生が1名おり、実質的には46名であった。その内、40名は初等中等教育専修(小学校教諭免許1種必修)2年生、5名は初等中等教育専修3年生、1名は現代マネジメント学部2年生である。

(2)保育指導法(環境)

保育指導法(環境)では、前半(4月~6月)に体験型の授業を行った。受講学生が体験内容した内容は、土づくりをする、小松菜の種蒔きをする、芽生えの観察をする、間引きする、里山の探検をする、小松菜を収穫する、お雑煮を作る、食べる、である。受講学生数は、85名で、全員が保育初等教育専修(幼稚園教諭免許1種、保育士資格必修)1年生である。授業は2クラスに分かれており、水曜日3時限44名と木曜日5時限41名であった。

2-2. 調査方法

それぞれの授業の前半(事前)と後半(事後)に、「生命のイメージ」を主題に絵を描かせた。授業担当教員が「生命、自然のイメージや、そこから感じとることを描いてください」と発問し、大よそ20分以内に仕上げてもらった。用紙ははがき大の和紙、描画材は16色のクレヨンとした。作品の裏面には、表現した意図について文章で記述してもらった。生活科では、事前を6月3日、事後を7月22日、保育指導法(環境)では、事前を5月8日および9日、事後を6月26日および27日に行った。

2-3. 絵画の分析方法

生活科 46 名，保育指導法（環境）85 名の受講学生の内，事前と事後の両方の作品を描いた学生を対象とした。事前のみ，事後のみの作品は対象から外し，生活科では 38 名，保育指導法では 83 名の作品を分析に用いた。作品の分析に用いた要素は次の①～③である。

①作品の造形要素

作品の「形・色・塗り方」について下記のカテゴリーに分類し，事前事後の変容について考察した。形の分類は，描かれている輪郭線と形，記述された内容を基に，具体的な事物が描かれている形を具象とし，図形や形が具体的な事物として表されていない面，直線や曲線などの有機的な線，スクリブルで描かれているものを抽象とした。具象のみ，抽象のみ，その混在したものに内容は分けられる。色の分類は，マンセルが行った分類法によるマンセル色相環を基に，それに対応した市販（サクラクレパス社，16 色）の調査で使用した描画材の色名を用いた。3 原色を中心とした赤系，青系，黄色系と，使用頻度の高い茶色系，緑系，無彩色において分類した。色の属性（色相，明度，彩度）による分類は行っていない。

a. 形<具象，抽象，具象と抽象>

- ・具象 {人，生き物，食べ物，植物（木，花，芽，その他），自然環境，その他}
- ・抽象 {点，直線，曲線，図形（丸，ハート，その他），スクリブル}

b. 色<緑系，青系，赤系，黄色系，茶色系，無彩色>

- ・緑系 {黄緑，緑}
- ・青系 {水色，青，紫}
- ・赤系 {薄だいたい，桃色，赤}
- ・黄色系 {だいたい，黄色}
- ・茶色系 {おうど色，茶色，こげ茶}
- ・無彩色 {白，灰色，黒色}

c. 塗り方<全色着色，図のみ着色，輪郭線のみ，その他>

②表現内容の記述

先行研究(1)で示されている a～d の視点をもとに，作品の表現内容と照らし合わせ分析する。

- a. 命や自然そのものを具体的な事物で表そうとしている
- b. 自然や命への気持ちや感じるものを表そうとしている
- c. 生命のエネルギーを表そうとしている
- d. 状況，状態，関係性（交わり，広がり等）を表そうとしている

③事例作品による質的分析

事前と事後に変化の見られる作品を事例として取り上げ，特に，「状況や関係性」へとイメージが変化した事例について考察を行う。

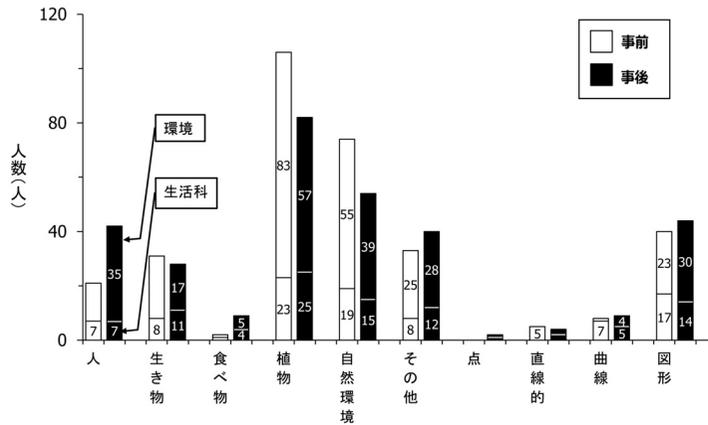


図1. 「描かれた形」
(対象者：計121名，生活科38名，環境83名，形別人数は延べ数)

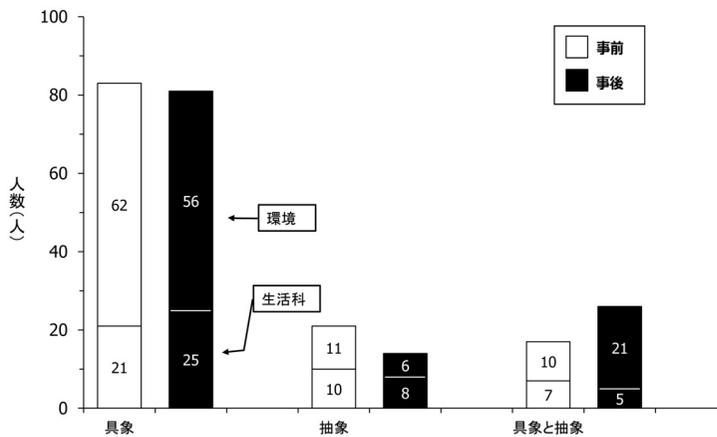


図2. 「形の分類」(生活科：38名，環境：83名，対象者：計121名)

3. 作品の比較分析と考察

3-1. 造形要素

(1)形

事前事後の作品は、2つの授業のどちらでも植物や自然環境を描いたものが多いになっている（図1および2）。どちらの授業でも野菜を栽培し、自然と生命を感じる内容を体験することから、この結果が出てきたと推測される。しかしながら、事前の作品では、ただ木や花等の植物を描いただけの作品が多かったが、事後の作品では植物を描いた作品の数が20%減少している。経験をとおして、生命の感じ方が変わり、植物だけではそのイメージが表せなくなったことが考えられる。また、植物の中で芽

を描いた作品が事前事後ともに目立っており、芽に「生命力」を強く感じた学生が多いことが関係していると予想される。

次に、人を描いている作品が事後の作品で 17% 多くなっている。栽培の経験を通して、「生命のありがたみ」、「生命の支え合い」、「生命のつながり」を感じる学生が増えたことが記述内容と照らし合わせて確認できる。実際に、これらの感情を表現するために、作品には、人が手をつないでいる姿や、手で生命を守り合っている姿が増えている。さらに、食べ物を描いた作品が、事後で 6% 増加している。授業の中で、自分達で育てたものを調理して食べるという経験をしたことが大きく関係しているであろう。食べるという行為から、生命のありがたみを感じた学生が増えたことで、食べ物を描かれた作品が多くなっていることがうかがえる。

形の分類の結果では、具象のみを表した作品が少し減少し、抽象を含んだ作品が 2

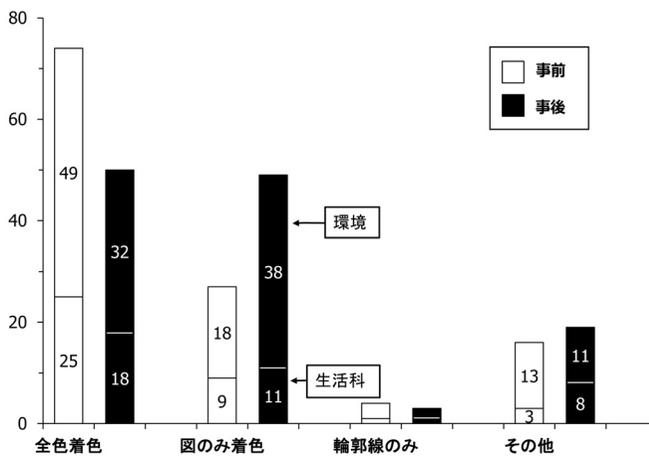


図 3. 「塗り方」(生活科：40 名，環境：81 名，対象者：計 121 名)

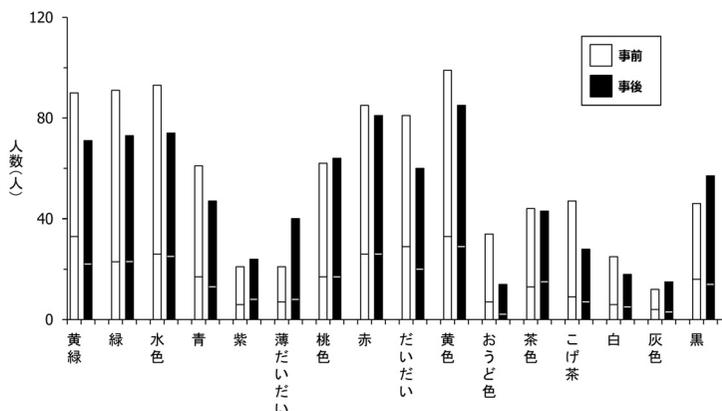


図 4. 「使用された色」

(生活科：40 名，環境：81 名，対象者：計 121 名，使用色別の人数：延べ数)

%増加している。生命を感じる経験をとおして、生命を事物として捉えるのではなく、状況や状態、関係性で捉える内容が増加している。また、抽象の中では図形が多いが、その中でもハートを描いた作品が、事前事後共に過半数ある。生命をハートのシンボルで表している作品が多く、そのハートの中に、経験で感じた様々な生命への想いが記述内容と照らし合わせ確認できる。

(2)塗り方

作品全体を着色した作品が20%減少し、図のみを着色した作品が増えている（図3）。自然の風景を全面に描いた作品が減ったことが関係しているのであろう。経験をとおして、ただ見える風景を描く学生が減ったことが塗り方の変容として表れている。

(3)色

図4から、自然を表すのに使われる色が多いことが目立つ。これは、形、塗り方の結果から考察したように、自然を描いている作品が多いこととつながっている。植物の黄緑・緑、空や海、水の水色・青、太陽の赤・だいたい・黄色が事前事後の作品両者とも多くなっている。しかし、この自然に使われているすべての色が、事後で減少していることが分かる。自然の風景や、植物だけを描いている作品が授業を体験したことにより、減少したことが関係していることが予想される。また、事後の作品で、薄だいたい色が16%増加しているのは、事後で、人が多く描かれているという形の分析結果と関係している。

3-2. 記述内容

事後の「生命のイメージ」を描いた作品に記述した内容は、おおよそ以下の4つに分類できた。

(1)生命や自然そのものを具体的な事物で表そうとしている

・「海に多数の命が宿っている」・「春夏秋冬、色々な自然、景色がある」・「地球があつての命」・「命に大切なものは太陽」・「動物、植物、人間等、みんな生き物は太陽の光を浴びている」・「人は生きもの、食べ物、自然に触れ生きている、それらはすべて必要なものであり、すべてに命が存在する」・「生命といえば、緑や青を連想し、緑や青からは木や山、海や空を連想」・「すべての命は自然によって支えられている、自然に生かされてる」・「命は周りのあらゆるもの（光、水等）に影響を受けている」・「雨の水をもらって植物は生きている」・「自然がある中で生命が生まれて、つまり自然がなければ生命は誕生しない」

(2)自然や生命への気持ちや感じるものを表そうとしている

・「一輪の花で明るくなれる」・「命を大切に、手で芽を温めている」・「命が包まれている感じ」・「すくすく育つ植物はの姿は、キラキラしている」・「命=愛（心の温かさ）」・「出たばかりの芽を応援したくなる」・「自由に飛んでいる鳥の命の自由さ・命には周りの愛が必要不可欠」・「人は手と手をつないで温もりを感じながら生きている」・「笑うことでより良く、明るく生きることができる」・「生命には明るいもの

だけじゃなくて、暗い部分もある」・「なにか嫌なことがあっても、雨が降っている雲の隙間から太陽が出てきて虹がかかるように、いつかは楽しくて幸せなことがある。これが生命の強さ」・「多くの命があるから、それぞれの思いや感じ方がある」・「食べることには色々な深い意味があり、感謝に満ち溢れた素晴らしいもの」・「自分たちで育てた野菜をたべることで、命に大切さを感じる」・「温かい命を頂くから『いただきます。』『ごちそうさまでした。』なんだと改めて感じる」・「手を抜いたらすぐ枯れてしまう植物だからこそ、命は大切にしなければならない」

(3)生命のエネルギーを表そうとしている

・「生命とは、力強く美しい」・「真っ暗の中から、一つの命が誕生」・「太陽の光によって新しい命の芽の誕生」・「硬い殻を破って土から芽を出す、生きることの力強さ、命の尊さ」・「小さな花も様々な自然の中で一生懸命育つ素晴らしい姿」・「川の流れに逆らって一生懸命泳ぐ魚の姿」・「太陽の光がすべてに生きる力を与え、周りが生き生きとする」・「生命の源である地球からのちが生まれてきている」・「母体にいる赤ちゃんも頑張っている、その命の誕生は奇跡」・「亡くなった祖父のように元気にたくましく咲いている花の様子」・「どんな花にも花が咲く瞬間があり、その時に生命の強さを感じる」

(4)状況、状態、関係性(交わり、広がり等)を表そうとしている

・「命は共存している」・「命が広がっていく感じ」・「命が形を変えてつながっていく」・「目からの涙で、様々な命が吹き返す」・「川があり、そこから芽から花と次々と命が生まれていく」・「生き生きとしているもの、枯れているもの等、どんな状態にあっても、すべて生命がある」・「鳥は木から実を食べ、その落ちた実から花ができ、花から蝶が蜜をもらい、このようにすべて命は支えあって関わっている(生命の連鎖)」・「植物は土の中の肥料の養分によって成長し、その植物の命をいただいて、私達は生きている(生命の連鎖)」・「命は自然の流れ、時間の流れの中で生きている、その生き方が生命」・「様々な人や文化など、世界にははっきりと分けられないものがたくさんある」・「想いや大きさなど、命の形はみんな違うが、命の価値は同じ」・「命は様々なものが当てはまり、様々なものが関わり、支えあって生きている」・「生まれて、死んで、芽生えるという流れ」・「命と時間の関係性(自然も時と共に変化する)」・「地球で起きていること、天気の変化、人、動物、植物はすべて関係しており、一つでは生きていけない」・「心は様々なことを経験して大きくなっていく」・「人と人とのつながりの中で命を感じ、手を取り合って、命を受け渡していく」・「生命は一人では大きく成長出来ないことを生活科の授業で改めて感じ、一つの双葉が様々な要素を受けて命が広がるのを感じる」・「自分の今までのイメージと生活科で経験したことを交える」・「人、植物等色々なものが合わさっている」・「命は世界中にたくさんあって、一つ一つバラバラなくどこか関わり合って、お互いに支え合いながら生きている」・「今までに育てた野菜が入っているカレーから、命は人間だけでなく、すべての命が助けあっていることを実感」・「植物の周りには、虫がいて、植

物は虫の食べ物でも人間の食べ物でもある」

記述内容から、事前と事後を比較すると、事後の方が生命の関係性や生命の力強さ、温かさを表現しようとしている作品が全体的に多くなっている。植物を育てるには、人が苦勞して世話をし、太陽が光を、雨が水を与えてくれ、そして、周りの虫と共存する等、様々な関わりが必要であり、「生命はつながっている」、一つではなく「支え合っている」と感じたことが作品に表れていることが分かる。植物を育てるには、様々なものが必要であると感じた学生や、植物を育て、実際に食べるという行為まで経験したことで、食物連鎖について考え、生命のつながり、生命の大切さを感じた学生等、生命に対する考えを深めることが出来たことが作品に表れている。直接的な経験をとおして感じることを豊かにし、生命に対する考え方が深まったことで、事前の時に感じていた生命への想いよりもさらに深めて、様々なことを感じたことが内容からうかがえる。

(1), (2), (3), (4)の分類を事前と事後で比較すると、大きく違いがみられるのは(1)の「生命や自然そのものを具体的な事物で表そうとしている」である。事前は47%と半数を占めているのに対し、事後では、32%に減少している。3章で述べてきたように、自然そのものや自然環境のみを描く作品が減ったことが関係している。次に変容が明らかであるのは、(2)の「自然や生命への気持ちや感じるものを表そうとしている」である。事前は15%、事後は27%という結果となり、13%増加している。直接的な体験により、生命について様々なことを感じ、考えが深まったことが、この結果につながっているのだろう。(4)「状況、状態、関係性（交わり、広がり等）を表そうとしている」作品については、事前は26%、事後は34%となっており、事後の作品の方が割合が増加している。自然そのものを視覚的に描くだけでは表現しきれなくなり、「生命の状況や関係性」を抽象的に表す作品が事後では増加したことが考えられる。

3-3. 事例作品から—「感じ方」の深まりと「状況や関係性」へのイメージの変容—

上記で示したように「自然や生命への気持ちや感じるものを表そうとしている」の

<事前> → <事後> <事前> → <事後>



【事例 Dさん】（環境）

【事例 Eさん】（環境）

内容は、事前は 15%、事後は 27% で、13% 増加している。「状況、状態、関係性(交わり、広がり等)を表そうとしている」作品については、事前は 26%、事後は 34% で、9% 増加し、合わせて 21% が、具体的、視覚的に風景や事物を表すことから、「感じ方」や「状況や関係性」という抽象的な内容へと変化した。事前事後において、生命のイメージが「状況や関係性」へと変容した作品事例の中で、特に「生命のつながり」「生命の支え合い」が顕著に表れている作品を抽出し、その表現内容を経験の質的な関係から考察する。

Dさんの事前の作品では、自然、生命のイメージを元となる地球で表現している。そして、生命の誕生を表現するために、元となる地球から、芽が生える瞬間を描いて、生命を表そうとしている。事後の作品でも、同じように地球が描かれている。しかし、地球の周りには、芽ではなく花が咲く姿に変わっている。このことについて作者は「生命とは、強くて美しいというイメージに変わったから。」と記述している。植物を育てるという経験の中から、作者は、芽の誕生よりも、そこから成長して、花が咲く瞬間に生命のさらなる力強さを感じたのではないだろうか。経験をとおして、生命に対する感じ方に広がりを持つことが出来たといえる。

Eさんの事前の作品では、作者の好きなヒマワリで生命を表現している。太陽に向かってのびのびと咲くヒマワリが活力に満ちている姿を描いており、自然の事物そのものに生命を感じているのであろう。事後の作品では、「生命の温かさ」をテーマにしている。「命あるものは、植物も動物も人間もすべて温かくきれいな色をしている。」と述べており、この想いから、鮮やかな綺麗な色で、作品を仕上げている。植物を一から育て、そして、「食べる」という行為まで経験したことで、命の温かさに気づき、生命をより深く感じる事が出来たのであろう。



【事例 Sさん】(生活科)

【事例 Iさん】(生活科)

Sさんの事例では、「つながり」、Iさんの事例では、「支えあい」へと生命のイメージが変化している。Sさんの事前の作品は、生命のイメージを「桃太郎」という物語に置き換えている。Sさんの中で、この時点では、「桃太郎」の物語が生命の誕生を

表す一番の方法であった。しかし、植物を育てるという体験をし、自分で命を育てた後の作品では、生命を育てた立場から捉え表現している。事後の記述では、「栽培していく中で、土の中にたくさん虫がいたり、植物の周りにも虫がいるのを見かけた。植物が成長するにつれ、植物が虫達の食べ物にもなっていき、このような姿に生命のつながりを感じた。」と、述べている。植物を一から育てることで、一つの命だけでなく、生命のつながり、連鎖に気づき、そのことが絵に表れている。双葉の周りに虫がたくさん描かれていることは生命の共存、「生命のつながり」の表れである。

Iさんの事前の作品では、生命の神秘的な感じが表現されている。中心の丸は、生命の温かさと太陽を重ねて描いている。太陽の周りに、いつも太陽の光を浴びている葉っぱ、葉っぱに必要な水を描き、一つ一つの生命を感じる作品に仕上げている。一方で、授業を体験した後の作品では、生命を事物として捉えるのではなく、抽象的に描いており、生命の状態や関係性を表現しようとしている。植物を育て、そして、その育てたものを食べるという行為を経験したことで、様々な命に触れ、たくさんの命があることに気づき、生まれた作品である。一つ一つの丸は命を表しており、すべての命はどこか関わり合っ、お互いに支え合っ、生きていることを表すために、丸を少しずつ重ねて描いている。授業での一連の経験をするにより、一つの生命についてだけではなく、周りの様々な生命との関係性について感じる事ができたのであろう。この作品の事前事後の比較をすると、生命へのイメージの膨らみ、表現内容の深まりが見られる。



【事例 Zさん】（生活科）

【事例 Jさん】（環境）

さらにZさんは、他者への関わりからイメージを捉えることへと変化している。Zさんの事前の作品の題名は、「しゃぼん玉飛んだ」である。自分が経験したことや感じたこと等、たくさんのがつまったしゃぼん玉が、まぶしい空に飛んでいき、一つになっていくという気持ちを表現している。この時のZさんは、自分の考える生命を次のように述べている。「私の考える生命は、自分がたくさんのことを見たり、聴いたり、感じたりしながら成長し、それが積み重なって大きくなるものだと思う。」

このような生命に対する感じ方が、授業の一連の体験をした後の作品では、変化している。「生活科の授業を受けて思ったことは、生き物の命は色々な（身の周りの）ものによって支えられて、大きくなっているということである。」と気持ちの変化を述べている。事前の作品では、自分一人での成長として生命を捉えていたが、事後では、様々な周りのものがあっての成長であると主張している。植物を育てる上で、生命は支え合っていかなければならないことに気づいている。

同じようにJさんも関係性へとイメージが変化している。事前の作品では、生命は太陽と草木というイメージで描かれている。太陽に生命力を強く感じたので、あえて真ん中に太陽を描いて、生命力の強さを主張している。事前の作品では、生命を自然のあらゆるものと捉えているが、事後の作品では、まったく違ったもので表現されている。事後の作品のテーマは「気持ちを支え合う心」である。作者は、「前回までは、自然のイメージしかなかったが、授業を受けてみて、“命”という言葉は、人と人のつながりの中で感じるものだと思った。」と想いを述べている。親がいるから子どもが生まれ、育てる人がいるから植物も育ち、このように命が誕生し、成長していくことを改めて感じたようである。一人では命は生まれえない、命は守れないと生命の支え合いを感じたのであろう。この様な想いを表すために、命をハートのシンボルで表し、そのハートを人と人の手で受け渡す絵を描いて、生命の支え合いを表現している。

4. 終わりに

本研究で対象とした授業における体験の特徴は、生命に直接に関わり、土を耕し、生命を育て、収穫し、食べるという一貫した過程を直接的に経験したことにある。特に着目したいところは、「間引き」である。人間が食べる野菜をつくるために「小さな生命」を殺さなければならないという行為が過程の中で発生する。その経験が、単に生命への慈しみや生命への共感では語れない、人間の生きるための本質的な問題や根底にある人間中心の日常の意識への気づきとなっていくことが考えられる。その事例にある経験の意義については、授業者自身による別研究において示されている⁽²⁾。本事例においては、このような人間の本質に向き合う体験において、「つながり」「感謝」「支えあい」というイメージが生まれていることが予想される。生命や自然との関わりや経験の質が深くなればこそ、イメージは、自然そのものを視覚的にとらえるだけでは表現しきれない内容へと至ることが考えられる。その結果、「状況や関係性」へとイメージはより変化していく。

謝 辞

本研究に協力いただいた、「生活科」「保育指導法（環境）」の受講生、及び授業担当者の野崎健太郎先生に感謝申し上げます。

■注

- (1)磯部錦司「自然観と＜生命＞表現の変容—外界との関係を問う絵画表現の実践から—」. 大学美術教育学会誌, 第33号, 2001年, pp. 53～60.
- (2)野崎健太郎「保育者・小学校教員養成課程の『生活科』授業における生命と食の学び」. 椋山女学園大学研究論集（自然科学篇）, 第43号, 2012年, pp. 6～7.